

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：14401
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2012
課題番号：24651286
研究課題名（和文）大衆婦人雑誌と女性読者-ジェンダーとメディア研究の新しい手法開発を 目指して-
研究課題名（英文）Women's Magazine and Women Readers: Toward the Development of a New Method for Gender and Mass Media Studies
研究代表者 木村 涼子 (KIMURA RYOKO) 大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 研究者番号：70224699

研究成果の概要（和文）：戦前期日本において本格的に大衆化した婦人雑誌の読者に対してライフヒストリー・インタビューを実施し、マスメディアが女性の価値観形成に果たす役割を抽出するための調査技法の検討をおこなった。

研究成果の概要（英文）：This study examines the investigation technique to analyze a function of mass media for formation of values, by interview to readers of women's magazine in the prewar Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：ジェンダー、マスメディア、歴史社会学、ライフヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

近現代社会におけるジェンダー秩序の形成において、マスメディアが果たす役割の重要性は繰り返し指摘され、さまざまなメディアが研究対象として取り上げられている。そうした今日におけるマスメディアの社会的機能を考察するためには、近代初頭におけるマスメディア台頭期に生じた社会現象をていねいに分析する必要があるだろう。もちろんマスメディアに関する歴史研究には膨大な蓄積があるが、ジェンダーの視点からの研究はいまだ発展途上にあるといえる。申請者は、ジェンダーの視点から近代初期に大衆化する婦人雑誌に着目することが、現代のメディア環境とジェンダー秩序との関連を解く上で不可欠の研究課題だと考える。欧米においても 19 世紀および 20 世紀初頭に登場した婦人雑誌に関する研究は、史料としての婦人雑誌の整理とともにそれらの位置づけを考察する女性史研究が着実に積み重ねられているし、個別の研究テーマを追究するため

に婦人雑誌を史料としてとりあげる研究も増えてきているが、婦人雑誌というメディアそのものを近代化の文脈に位置づけて社会的に扱う研究はまだ十分に展開されていない。

申請者は、本研究開始以前に、戦前の大衆婦人雑誌を素材に誌面の多面的分析を通じた研究を蓄積してきた。もっとも最近の研究としては、平成 19-20 年度・基盤研究(C)一般科学研究費補助金「大衆婦人雑誌にみる近代日本のジェンダー形成 - 誌面の多面的分析と読者調査」(課題番号 19510274)を挙げることができる。この研究では、1) グラフィック情報について図像処理ソフトを用いての類型化分析、2) 膨大な量に及ぶ実用記事について内容分析手法を用いての数量化、3) 婦人雑誌に連載されていた通俗小説について物語構造分析の手法を用いての分析などを行い、婦人雑誌という多機能媒体によって、いかにジェンダー秩序が形成され、大衆に伝播していったかを明らかにすることをめざ

した。

研究代表者はその成果を単著『〈主婦〉の誕生 - 婦人雑誌と女性たちの近代』(吉川弘文館、2010年出版)にまとめた。本書は、第32回日本出版学会賞および第3回昭和女子大学女性文化研究賞を受賞するとともに、日本教育学会、日本教育社会学会など多くの学会において書評対象として取り上げられるなど、高い評価を受けている。

上記著書では、婦人雑誌が読者に提示しているバーチャルな世界観を総合的に描き出すとともに、読者とメディアの関係性に関する仮説的な議論を発表した。本研究は、その成果をさらに発展させる方法論を検討するため、換言すれば次の大きなステップを構想するための、挑戦的研究である。

## 2. 研究の目的

本研究は、上述した著書で展開した仮説的な議論を基に、大正期から昭和初期にかけて本格的に大衆化した婦人雑誌と、学校教育の普及を背景に拡大した女性読者層がとり結んだ関係性について、当時実際に婦人雑誌を講読していた年代の女性へのデプス・インタビューを通じて明らかにするとともに、その調査技法の開発・洗練化を目指す。

誌面分析は受け手調査との統合によって、はじめて立体的な意味をもつ。婦人雑誌が読者にどのように受容されていたのかに接近するために、平成20年度には戦前に婦人雑誌を講読していた女性層への聞き取り調査を開始しているが、時間やプライバシーの問題などさまざまな制約から、パイロット調査の段階にとどまっている。

本研究では、残された課題となった読者調査の本格的な実施をおこなうため、1930年代に婦人雑誌の読者であった可能性が高い、当時の女子中等教育機関であった高等女学校の卒業生(現在80歳から90歳)の方々にコンタクトをとり、「生の言葉」としてのドキュメント資料を収集し、具体的な個別の女性の人生においてマスメディアが持っていた意味を掘り起こす調査をおこなう。そうすることによってはじめて、これまで蓄積してきた婦人雑誌誌面の多面的分析結果をジェンダー研究の成果として活かすことができると考える。

マスメディア研究も、女性のライフヒストリーもそれぞれに蓄積されているが、両者を関連づける発想での研究はほとんど存在しない。その理由としては、メディア研究者の問題意識と、女性史研究者あるいはライフヒストリー研究者の問題意識が合致してこなかったということと、人々がライフヒストリーを語る際に自発的にはマスメディアに言及することが少ないという、二点が挙げられる。後者については、申請者自身がパイロットスタ

ディとして、高齢女性にインタビューした際にも感じられた「むずかしさ」であった。ライフヒストリーの流れに添うタイミングで、こちらから具体例を挙げながら意識的に質問することによってはじめて、人々の記憶の中から当時読んだ雑誌や本、愛好した映画や歌と、それらから受けた響が浮かびあがってくる。申請者は、それこそがマスメディアの影響の特殊性ではないかと考えている。マスメディアと読者との関係性は、読者自身には特別な事柄として意識されにくい形で成立しているからこそ、インタビュアーが具体的な事例や仮説をもって引き出す努力をしない限り、インタビュイーの意識上に上ってこないのである。

本研究は、メディアの影響力をオラル・ストーリーとして引き出す「むずかしさ」と向き合う。高齢女性を対象に、ライフステージごとのマスメディア経験とそのことへの女性自身の意味付けをていねいに解きほぐす調査技法を試行することによって、近代化途上の社会生活に関する貴重なデータを収集しながら、その調査技法の検討を行う。

婦人雑誌誌面の多面的な分析を基に、それらの統合によって再現された婦人雑誌の世界と、当時の読者の「生の声」を結びあわせることによって、人々の生活世界におけるマスメディアの位置を立体的に描き出すことが、本研究課題の最終的な目的であり、その目的が達成されるとすれば、マスメディア研究とジェンダー研究のそれぞれにおいて、あるいは両者を結びつける研究領域において、新しい成果を生み出す道筋を開拓することにつながるだろう。

## 3. 研究の方法

本研究では結果的に、二種類の調査を実施することとなった。

第一は、当初の目的であった、婦人雑誌読者を対象とするライフヒストリー調査である。マスメディアの本格的な大衆化時代の婦人雑誌を主に念頭において、マスメディア情報の「受け手」(読者)へのライフヒストリー・インタビュー調査を行った。現在直接の面談が可能な年代で、当時婦人雑誌を講読する経済的余裕と読書習慣をもっていた社会階層の女性(高等女学校卒業生、現在80~90歳代)の女性を調査対象とした。当初の予定では、近畿圏内の旧制高等女学校および女子専門学校の同窓会組織に協力を依頼し、現在80歳から90歳の年齢層で聞き取り調査に協力いただける方を、郵送依頼によって募り、調査協力可能のお返事をいただいた中から5~7名の方々に、おひとり3~5回(合計時間10時間)ほどのデプス・インタビューを実施する計画であったが変更を余儀なくされ、個人的な「つて」を通じて3名の方へのデプス・

インタビューとなった（この点については「研究成果」において後述）。

全般的なライフヒストリーを追いつつ、ライフヒストリーのステージごと／重要なライフイベントごとに当時抱いていた、人生観や自己評価、性役割や恋愛観・家庭観などジェンダーに係る価値観について聞き取りを行う。その際、語り手のストーリーを妨げないように留意しつつ、家庭環境、学校教育経験、児童期・青少年期・成人初期にいかなるマスメディア情報に接し、どのような影響を受けていたかについての質問を意識的におこなう。狭義のマスメディアのみならず、当時のファッションやスポーツなど大衆的な流行文化、若者文化にも目配りをし、語り手が「空気のような自然環境」として特に意識することが少ない時代の雰囲気や風俗についての記憶を引き出すことをこころがける。聞き取りを実施する途上で段階的に、調査技法の妥当性・有効性に関する検討をおこなった。

第二の調査は、第一の調査をすすめる中で浮上してきた研究課題に応える形で実施された。女性向け通俗小説を書いて人気が高く、1930年代には非常に著名であった作家・加藤武雄氏の親族を対象とする、婦人雑誌のメディア内容の「送り手」（ここでは連載小説作家であり、著名文化人としてエッセイや対談でジェンダーに関するメッセージを発信していたことを意味する）へのライフヒストリー調査である。

これまでの申請者の研究において、女性向け通俗小説は、女性読者の情緒的満足や価値規範形成に大きな影響をもっていたことが推測されてきた。女性向け通俗小説を書いて1920年代・1930年代に活躍した作家には、吉屋信子、加藤武雄、中村武羅夫、三上於菟吉、山中峰太郎、小島政二郎、牧逸馬、竹田敏彦などがあるが、それらのうちでも多産で大衆的人気を誇った加藤武雄（1920～1930年代に100本以上の作品を発表している）に焦点をしばり、親族や知人に対する聞き取り調査をおこない、作品の背景となる生活状況・価値観、通俗小説作家としての活動の実態を明らかにすることは、継続的な研究課題となっている。加藤は、戦前の活躍にもかかわらず、その作家生活やライフヒストリーについてほとんど明らかにされておらず、これらをケーススタディとして探求することは、通俗小説が生み出される生産の現場や社会的文脈を理解する上で非常に貴重なことだと思われる。加藤武雄については、これまでの研究において、すでに親族にコンタクトをとることができているが、今回は、婦人雑誌読者層（受け手）という第一の調査対象類にもあてはまる、加藤氏の次女・三女の方々に、調査協力を得ることができ、彼女たちのライ

フヒストリーとともに、彼女たちにとっては父であった加藤武雄氏の作品の背景となる生活状況・価値観、通俗小説作家としての活動の実態も明らかにする。

#### 4. 研究成果

研究成果については、二種類の調査を区別して述べていく。

第一の「受け手」調査については、戦前の婦人雑誌の購読層として、80歳代後半から90歳代の女性数名に、インタビュー依頼し、2012年度内には3名へのインタビュー調査を実施することができた。年度当初に予定していた、近畿圏内の旧制高等女学校もしくは女子専門学校の同窓会組織に協力を依頼しての郵送調査は、個人情報保護の観点から実施することがかなわなかった。結果として、申請者自身の個人的な縁故と、戦前の大衆通俗小説作家・加藤武雄氏の親族のご協力を得て、かつての婦人雑誌読者といえる知人を紹介いただき、知人つながりで調査依頼を行うこととなった。

各調査対象者、2～3回の面談、延べ6～10時間のデプス・インタビュー調査を行うことによって、婦人雑誌情報の受け手側の視点から、昭和初期の家庭教育・学校教育・マスメディアのそれぞれがもっていた教育的機能の相互の関連を、個々人の「女性」としてのライフヒストリーという時間の流れの中に位置づけるための貴重なデータを得ることができた。

前述したように、マスメディア史研究も、近代日本の女性のライフヒストリー研究もそれぞれに蓄積されているが、両者を関連付ける発想での実証的な研究は少ない。その背後には、過去のマスメディアについての本格的な読者調査が困難であることと、ひとびとが自らのライフヒストリーを語る際に、生育歴の過程でマスメディアが「自然な環境」として大衆化していればいるほど意識されることが少なく、結果として自発的には言及されがたいという事情が挙げられる。

その「壁」を乗り越える技法に関して、本研究から明らかになったことは以下の三点である。

(1) メディアについて項目的／表層的に「愛読書は？」「愛読した雑誌は？」といった尋ね方をするのではなく、調査協力者が語るライフヒストリーの流れにあくまでも沿いつつ、具体的なエピソード、ライフイベントごとに、当時の生活環境の一部としてマスメディアの記憶を呼び起こすこと。

(2) 記憶の中に、当時読んだ本や雑誌、愛好した映画や歌、流行のファッションや言葉など、「何か心に残っているもの」を糸口として、当時の出来事と価値観や思い、その中に織り込まれた多様なマスメディア文化に係

る「語り」を、さまざまな要素が複合されたままに聞き取ること。

(3) ある調査協力者のライフストーリーの中で語られた事柄を、別の調査協力者のインタビューを行う際のヒントとして活用するなど、調査者を媒体に各人の「語り」を呼応させることによって、昭和初期に児童・青少年期を過ごした同世代の共通の記憶を描き出すこと。

以上3点を重視することによって得られた「語り」のデータを、調査者の視点から分解し、再構築することが肝要となる。

ライフストーリー・インタビューをおこなう中で、マスメディアや大衆文化の「何か」が内面化された経験と、「女性」として生きる上での価値観・経験・ライフイベント・人生における選択などは、密接に関連していることが、あらためて感じられた。マスメディアとジェンダーに関わる人生経験との関係性は、補足的に実施した、女性向け通俗小説作家の生活や思想についての親族への聞き取り調査結果とつきあわせることで、立体的な考察が可能になるとの手ごたえを得た。

第二の「送り手」調査は、戦前の婦人雑誌を舞台に活躍した通俗小説作家・加藤武雄氏の親族への聞き取り調査と文献調査を組み合わせでおこなった。これは、婦人雑誌読者、すなわちマスメディア情報の「受け手」のライフストーリー・インタビューを異なる方面から補うものとして、当初の研究計画に追加されたものであるが、以下の二つの研究課題をもつものとなった。

(1)多くの女性愛読者を有した加藤武雄の文学論・通俗小説観、女性観・家庭観をあきらかにすること。これについては、文献の精査をおこなうとともに、家族親族に対して、「父」や「伯父」としての加藤武雄個人の生活史・日常生活・信条に関するインタビューを実施した。その結果として、加藤武雄が神奈川県農村に生まれ、農民文学を志しつつ、東京で女性向けの通俗小説作家として名を成し、親族に限らず故郷や、農民文学を志す人たちに経済的援助をおこなった人物であること、成城学園が設立されるとともに移住し子どもたちをすべて成城学園に入学させるなど、リベラルな知識人としての生活や交際を発展させていたこと、女性向けの通俗小説を書くことに「違和感」をおぼえながらも、女性読者を喜ばせるだけでなく、「心の栄養」となるものを作品の中にも含めることに腐心していたこと、家族や親族に対しては鷹揚で優しい父・伯父であったことなど、彼の作品が生産される生活的文脈と思想的文脈を明らかにすることができた。

(2)加藤武雄氏のお子さんたち、とりわけ娘さんたちを対象に、通俗小説作家を父にもつ

女性のライフストーリーの特徴を明らかにする。「父」としての加藤武雄氏に関する思いだけでなく、母の存在、両親の夫婦関係、娘たちへのしつけや期待とともに、ご本人の「女性としての生き方」に、父加藤武雄の作品や作家生活、〈成城〉という文化圏の影響、父が関わっていた文学やマスメディア世界がどのように影響したかを語ってもらうことができた。その結果として、父を柱として展開する文学／マスメディア／知識人世界に、3人の娘さんたちがそれぞれ影響を受けていること、しかしながらその影響の受け方は一様ではなく、各人の個性や学校体験などの違いによって、女性としての考え方や生き方は三人三様に展開していったことが明らかになった。父加藤武雄の作品を、娘さんたちがどのように読んだか／読まなかったか、加藤武雄氏が娘さんたちに自分の作品を読んでほしいと思っていたかどうかなどについても、記憶をたどっていただき、加藤武雄氏が、女性向けの通俗小説に関して揺れ動く価値観・自負をもっていたことが浮かび上がってきている。これらについて結論づけることには慎重であるべきだと感触を得ており、今後さらなる調査の必要性がある。

以上が、本研究の研究成果の概要である。今年度は時間的制約と調査者の健康上の理由から、成果を公表する機会をつくることができなかつたが、貴重なデータは確実に得ている。本研究が目指した、メディアと読者の関係性を引き出すための、新しいライフストーリー調査技法を洗練化するという目的に向けて、引き続き追加調査を行いながら、本年度得たデータの解釈・分析をすすめ、今後、研究成果として公表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木村 涼子 (KIMURA RYOKO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：70224699